

2011年6月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

月平均500 hPa 高度は、北極域で正偏差となった。リッジの発達したグリーンランド付近からロシア西部にかけては波列パターンがみられた。太平洋東部ではリッジが発達し、米国南部付近では高気圧が明瞭だった。東シベリア付近は負偏差で、オホーツク海高気圧はほとんど形成されなかった。日本の南海上の太平洋高気圧は平年より強かった。ジェット気流は、日本付近では平年に比べて強く、下旬は北寄りとなった。

熱帯の対流活動は、フィリピン付近から太平洋西部にかけて平年より活発、インド洋では不活発だった。また、カリブ海付近では平年より活発だった。赤道季節内変動は2つの異なる周期の変動が卓越した。1つは1か月より短い周期で東進するもの、もう1つはインド洋から太平洋西部にかけて相対的にゆっくりと東進するものである。赤道域の対流圏下層は、インド洋東部から海洋大陸付近にかけて西風偏差、太平洋中部で東風偏差が卓越した。対流圏上層では、太平洋中部で低気圧性循環偏差が明瞭だった。チベット高気圧は、西側で平年より強かった。南方振動指数は+0.5だった。

世界の天候

2011年6月の世界の月平均気温平年差は+0.16°Cで、1891年の統計開始以来、6番目に高い値となった。6月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.66°C/100年である。主な異常天候発生地域は次のとおり。

○中央シベリア南部～西シベリアでは、異常高温となった。

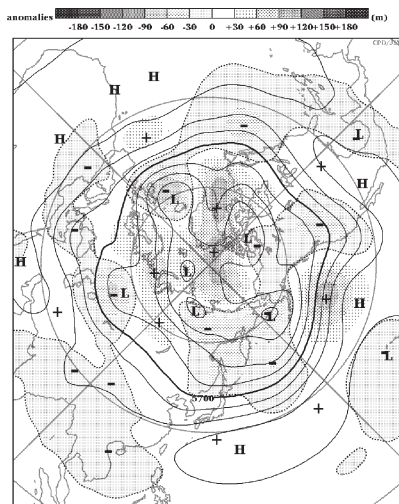
○米国南部～メキシコ北部では、異常高温、異常少雨となった。また、米国南部や南西部では複数の大規模な森林火災が発生したと伝えられた（米国海洋大気庁）。

○中国南部では、大雨による洪水や地滑りにより170人以上が死亡したと伝えられた（中国政府）。

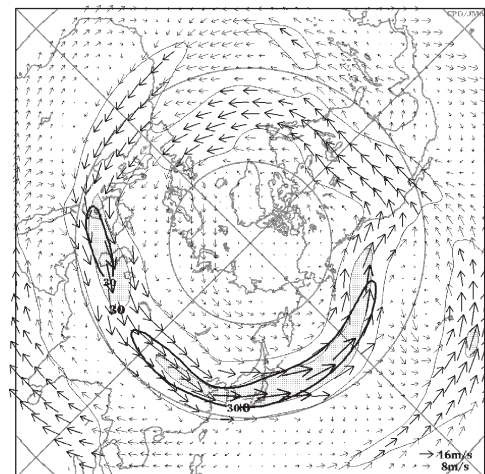
（気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課）

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

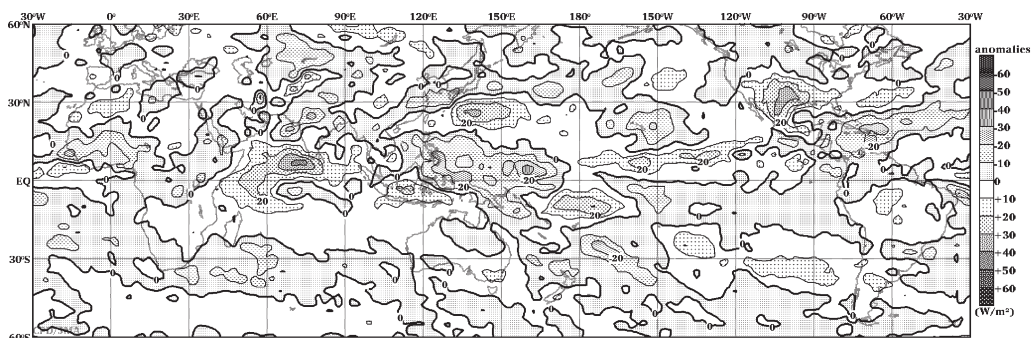
<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



2011年6月の北半球月平均500 hPa 高度および平年偏差
等値線間隔は60 m。陰影は平年偏差。平年値は1981～2010年のデータから作成。

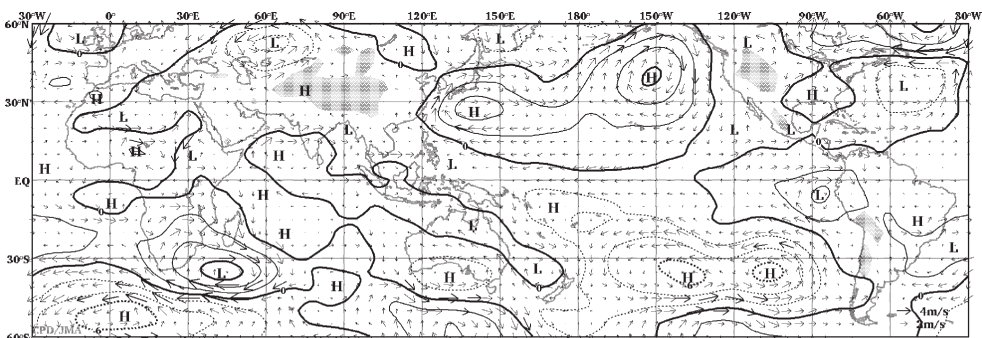


2011年6月の北半球月平均200 hPa 風速および風ベクトル
等値線間隔は15 m/s。陰影部は30 m/s以上。太実線で囲まれた領域は平年の30 m/s以上の領域を示す。平年値は1981～2010年のデータから作成。



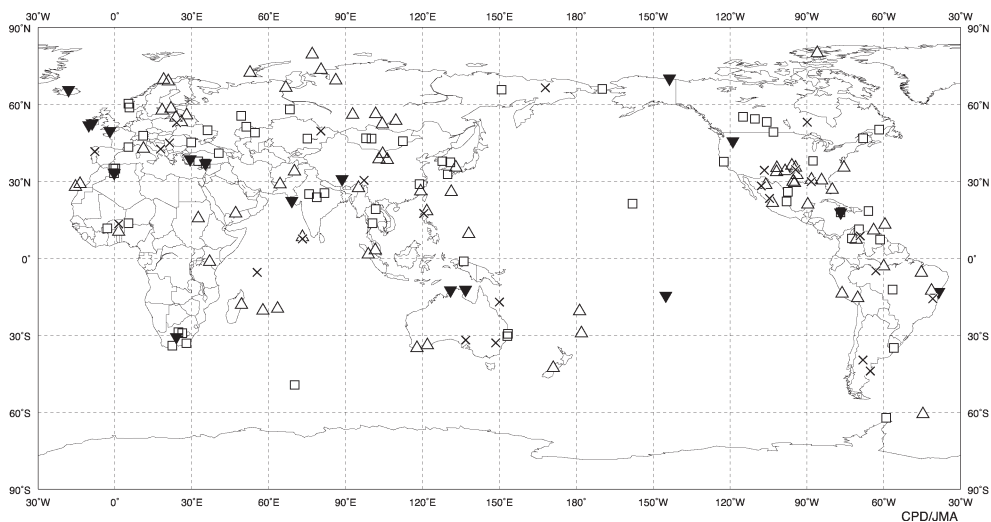
2011年6月の月平均外向き長波放射量年偏差

等値線間隔は 10 W/m^2 で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。元データはNOAA。年偏差は1981~2010年のデータから作成。



2011年6月の月平均850 hPa 流線関数年偏差および風年偏差ベクトル

流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1981~2010年のデータから作成。



2011年6月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
異常高温・低温は標準偏差の1.83倍以上，異常多雨・少雨は降水5分位値が6および0。